

# 梅津新聞

(古代編③)

2020年  
5月12日 火曜日

常陸太田市郷土資料館  
(西二町 2186)  
TEL:0294-72-3201

## 久慈郡の中心は 薬谷町・大里町にあった!

大化の改新(645年)の後、律令政治のしくみがととのえられ、地方は国と郡と里にわけられました。現在の茨城県ひたちらのくにの大部分は常陸国ひたちらのくにに属していました。政治の中心である国府は現在の石岡市いしおかに置かれ、その近くには聖武天皇の命により、国分寺・国分尼寺が建てられました。また、常陸国は11の郡からなり、現在の常陸太田地区・金砂郷地区・水府地区は久慈郡くじ(または久自郡)に、里美地区は多珂郡たか(または多賀郡)に属していたようです。

約12,000年前	縄文時代
約2,500年前	弥生時代
3~6世紀	古墳時代
7世紀	飛鳥時代
8世紀	奈良時代
9~12世紀	平安時代

久慈郡の郡衙(郡の役所)や郡寺は、出土している瓦や焼き米などから推測するに、薬谷町・大里町にあったものと考えられており(長者屋敷遺跡)、奈良時代はここが久慈郡の中心地であったと思われれます。ここで出土した土器には「久自」や「大畠」などの文字が書かれたものや、布目模様のある瓦、国内でも珍しい幾何学模様のある埴はが見つかっています。埴とは建築材料のひとつで、レンガやタイルのようなもの。粘土を型に入れて成形し、そのまま乾燥させたもの(または焼いたもの)です。朝鮮半島の古墳にも見られますが、国内では寺院に使われることが多く、特に幾何学模様の埴は、平城京など全国で3例しかなく、朝鮮半島の影響を受けた寺院があったことが考えられます。

## こんなに出土している!文字が書かれた土器の破片

墨すみで文字が書かれている土器を墨書土器ぼくしょどき、ヘラなどで文字が刻まれている土器を刻書土器こくしょどきといいます。市内の遺跡からは墨書土器や刻書土器の破片がたくさん見つかっています。

こんなものも発見しました!

円面硯墨えんめんけんぼくをする部分が円形の硯すずりのこと。硯部と脚部すずりぶが平らでその周りに溝みぞがめぐっています。脚部にはくりぬいた窓や飾りまどがつけられています。主に役人やくにんが使ったものです。



「野本」



「佐都」



「中」



「前ノ」



「歳」



# 歌にこめられた ふるさとへの思い…

## 防人と万葉集

久慈川は 幸くあり待て潮船に  
 真楫しじ貫き 吾は帰り来む

(丸子部佐壮)

足柄の み坂たまはり 顧みず

吾は越え行く

荒し男も 立しやはばかる 不破の関

越えて吾は行く

馬の蹄 筑紫の崎に 留り居て

吾は斎はむ

諸は 幸くと 申す 帰り来までに

(倭文部可良磨)

上の2首の和歌は、『万葉集』におさめられていた防人の歌です。

『万葉集』とは、奈良時代につくられた、日本に現存する最古の和歌集です。大伴家持が編さんしたといわれ、天皇や皇族、貴族、兵士、農民までさまざまな身分の人たちの歌がおさめられているのが特徴です。

『万葉集』には常陸国の防人の歌が10首おさめられており、その中でも久慈郡出身の防人が詠んだ歌が2首あります。

丸子部佐壮の歌は「久慈川は変わることもなく待っているよ。防人の任期が終わったら、海を行く大船にたくさんの楫を取りつけて、大急ぎで私は帰ってこよう。」、倭文部可良磨の歌は「足柄の坂を、私は後ろもふり返らずに越えていく。荒々しく勢いが盛んな男子も立ち止まり、行くのをは

ばかり不破の関も私は越えて行く。筑紫の岬に留まり、私は潔斎してしよう。人々は無事でと神に願おう、帰ってくるまで。」という意味が込められています。

防人とは諸外国からの侵略を防ぐため、警備のために現在の北九州地方に派遣された兵士です。任期は3年で、武器や食料は自分で負担しなければなりません。防人として働き、無事に故郷に帰ってくることはとても大変なことでした。

※1 足柄：現在の神奈川県と静岡県の間境付近

※2 不破の関：現在の岐阜県不破郡関ヶ原町にあった関所

※3 筑紫：現在の福岡県にあった

※4 潔斎：身を浄めること



「幸久橋のすぐそばには、丸子部佐壮の歌が刻まれた「防人の碑」が建っている（上河合町）」